

「光る君へ」で注目集まる平安時代 紀貫之、清少納言ゆかり「蟻通神社」の知られざる祭神

2024/5/17 10:00 

大河「光る君へ」

NHK



奉納された「三十六歌仙図絵馬」の紀貫之＝大阪府泉佐野市の蟻通神社（藤谷茂樹撮影）

NHK大河ドラマ「光る君へ」で注目度が高まる平安時代。貴族の間にも流行した熊野詣の道中、大阪府南部の泉州地域にはこの時代の逸話も多い。蟻通（ありとおし）神社（泉佐野市）の祭神を巡る伝承には歌人、紀貫之が登場。清少納言の「枕草子」には、その祭神が知恵比べで国を救ったとされている。どんな伝承なのか探った。

紀貫之が詠んだ和歌

5月9日、日が沈んだ蟻通神社の境内にはかがり火が焚（た）かれ、厳かな雰囲気にも包まれた。江戸時代に建立された「舞殿」を舞台とした能の上演会「ありとほし薪能（たきぎのう）」最後の演目「蟻通」は能楽師、山階彌右衛門さんが神の化身である宮守役を務めて披露された。

「蟻通」は蟻通神社の祭神にかかわる内容で、平安前期の歌人、紀貫之にまつわる伝承を基に、室町時代に能楽を大成した世阿弥（ぜあみ）が作った。

紀の国から都に戻る道すがら、貫之が乗る馬が動かなくなった。通りかかった人（能では宮守）から、この場所に社があったと伝えられ、その神に祈るよう勧められる。貫之はこの歌を詠む。



蟻通神社の境内で上演された紀貫之の伝承を基に世阿弥が作った能「蟻通」＝5月9日、大阪府泉佐野市（藤谷茂樹撮影）

《かきくもり あやめも知らぬ 大空に 有りと星をば 思ふべしやは》

「有りと星」を「ありとほし」とかけており、能では和歌の文言に違いはあるが、伝承と大筋は同じ。和歌を通じ神仏の心を動かした「歌徳説話」に数えられている。

国難救った優しき英雄

馬上のまま通り過ぎる無礼を許さなかった威徳ある神のように捉えられるが、どんな神なのか。清少納言が「枕草子」に詳しく書いている。蟻通神社の木戸聖子宮司は「宮廷文化の中心にいた清少納言が、どういう経緯で知ったのか。歌を学ぶ中で興味を持ってくれたのかもしれない」と思いをはせる。



紀貫之や「蟻通」の社名の由来となった伝承を描いた本殿の板絵について解説する木戸聖子宮司＝令和6年5月、大阪府泉佐野市の蟻通神社（藤谷茂樹撮影）

伝承はこうだー。老いると命が奪われた時代、年寄りには隠れるように暮らしていた。唐土（もろこし）（中国）がこの国に攻め入ろうとして、知恵比べに難題をけしかける。だが、中將が帝に解決方法を示していく。

最後は「曲がりくねった玉の穴に糸を通せ」というもの。中將は、糸をくくりつけた蟻を用意し、出口に蜜を塗って穴を蟻が通る方法で乗り切った。帝が褒美に官位を与えようとする、中將は知恵は父から教わったと明かし、年老いた両親の助命を申し出る。その後、心優しい行動に出た中將が蟻通明神として祀（ま

つ）られたというのだ。

現代も変わらぬ信仰心

江戸時代後期、これらの伝承に冷静な分析を加えた文献が登場する。中盛彬（なか・もりしげ、1781～1858）が著した「かりそめのひとりごと」だ。

現在の大阪府南部にある熊取町で庄屋の家に生まれ、国学に精通した盛彬は見聞した泉州の事物を記録した。それが「かりそめのひとりごと」で、網羅的な内容から後世に「拾遺泉州志」とも題された。

そこには「蟻通明神」について、知恵比べの話を中国の故事にある「棄老伝説」と指摘。そのうえで蟻通の名も熊野街道沿い「通りにあった」という位置関係が伝承と結びついたとみている。

実際、熊野詣は多くの人が連なったことから「蟻の熊野参り」とも呼ばれ、「有り」と「蟻」が結びついたと社名の由来をみる説もある。

だが、古くから厚い信仰を集めていたことは確かだ。木戸さんは「雨乞いの神として信仰され、村の人が神社に籠って雨を願ったという記録もある」と教えてくれた。

泉州地域は瀬戸内海式気候のため雨は少なく、大きな河川もない。このため、田畑を潤す灌漑（かんがい）用水やため池が発達した歴史を持ち、水不足は死活問題だった。

薪能の舞台となった「舞殿」は初代岸和田藩主の岡部宣勝が神社再建の際、建立したとされている。ちょうどその時期とされる万治3（1660）年には、ゆかりの紀貫之を含む「三十六歌仙図絵馬」が奉納されている。

また、戦時中の昭和17～19年には、飛行場建設に伴い遷座を余儀なくされた。徴兵で戦地に赴き男手が少ない中でも、氏子たちは曳（ひ）き家で約1・5キロ離れた場所に神社を移転させた。



紀貫之、清少納言の伝承が残る蟻通神社＝令和6年5月、大阪府泉佐野市（藤谷茂樹撮影）

「遷座の後、建物の配置も元通りにされている」と木戸さん。それだけ神社に対する信心が深かったということだ。「これからも人々の心を慰め、穏やかにする場所としていきたい」と話した。（藤谷茂樹）

©2020-2024 The Sankei Shimbun. All rights reserved.